

ハムソクホン
咸錫憲における歴史の意味

—「苦難の僕」と「受難の女王」を通して—

朴 賢 淑

**Meaning of History in Ham Sokhon
Through “Servant of Suffering” and “Queen of Suffering”**

Park, Hyun Suk

抄 録

咸錫憲の歴史観は、聖書に基づく歴史哲学であり、その基調は「苦難」である。本稿は1981年日本で行われた講演「歴史の意味」を中心に考察されている。咸錫憲は1980年に突然、それまで関わっていた雑誌『シアレスリ』が軍事政権により廃刊された。このシンポジウムに参加したことで、彼は苦しみの中にいる世界の人々と連帯できる契機を得た。

本稿は、聖書における「苦難の僕」が咸錫憲の歴史観に取り入れられた背景を明らかにするとともに、咸錫憲のもう一つのモチーフ「受難の女王」が、やがて期待の「栄光の女王」へと導き出された経緯とその意義について考察されている。

キーワード：^{ハムソクホン}咸錫憲、歴史の意味、「苦難の僕」、「受難の女王」、「栄光の女王」

(2022年9月20日受理)

Abstract

Ham Sokhon's view of history is a historical philosophy based on the Bible, and its keynote is "Suffering." This article is based on his lecture "The Meaning of History" given in Japan in 1981.

In 1980, the magazine Sialesori, which he had been involved with until then, was suddenly closed down by the military government. Participating in this symposium gave him the opportunity to form solidarity with the suffering people of the world.

This paper clarifies the background of how the "servant of suffering" in the Bible was incorporated into Ham Sokhon's view of history, and how another of his motifs the "Queen of Suffering" eventually became the hoped for "Queen of Glory."

Keywords: Ham Sokhon, view of history, Servant of Suffering, Queen of Suffering, Queen of Glory

(Received September 20, 2022)

1. はじめに

本稿の目的は1981年に行われた咸錫憲の講演「歴史の意味」¹を基に咸錫憲の歴史観を神学的な視点から考察することにある。この講演は咸錫憲が行った日本語講演であり、後に『九月会議』として書籍化された。さらにこの書籍は2020年、日本キリスト教団出版局より編集・出版され²、今もなお注目されていることがわかる。この集いは世界で抑圧されている人々の苦難を共に背負う宗教者たちを押田成人が招いた形で行われた。「九月会議」とも呼ばれるこの集いに、咸錫憲は世界のプロテスタントを代表して招かれたのであった。

本稿では「九月会議」の中で咸錫憲が行った講演「歴史の意味」を基に、次のような研究方法を通して、その歴史観を考察していく。研究方法としては、これまでの先行研究を述べた後、第1に咸錫憲の講演「歴史の意味」を通して明らかになったキリスト教の核心とも言える「苦難の僕」のモチーフをその歴史観に取り入れた経緯について言及する。第2に、「九月会議」での講演を通して明らかにした「苦難の僕」の展開について考察する。第3としては、咸錫憲のもう一つのモチーフである「受難の女王」についての思索の推移を読み解くことにする。

2. 先行研究の検討

最近の咸錫憲研究は、以前に比べて多方面で学際的なアプローチが成されている。その範囲は歴史、生命、宗教、そして政治・社会的な側面に留まらず、咸錫憲の念願であった南北統一を実現していく平和問題へと進んでいく傾向にある。

本稿の先行研究としては、これまで咸錫憲の歴史観について論じた二つの論文を取り上げることにする。先行研究を考察していくことで、本稿が目標とすることを明確にし、それについて述べていくことにする。

第一に取り上げる論文は、盧明植(노명식)の論文「토인비와 함석헌의 비교는 가능한가(トインビーと咸錫憲の比較は可能か)」³である。西洋史学者の盧明植は、トインビーの著作『歴史の研究』を韓国語に翻訳した人物として知られている。彼はその論文の中で、トインビーと咸錫憲の歴史を見る視点を比較し論じているが、ここではまず盧明植の研究を次の三点に焦点を当て取り上げることにする。

第一は、トインビーと咸錫憲は共に歴史の本質を苦難であると把握していると述べる。盧明植はトインビーの『歴史の研究』における挑戦と応戦(challenge and response)が、咸錫憲の苦難とその克服に類似する概念であると主張する。トインビーの「応戦に成功する」というのは、咸錫憲においては苦難に打ち勝つことを意味するものであり、「応戦に失敗する」ことは咸錫憲において苦難を乗り越えることが出来ず後退することを意味していると盧明植は解釈している⁴。

さらに、盧明植はトインビーが長年の研究を通してたどりついた結果として歴史の本質を苦難においたのに対し、一方の咸錫憲は自らの体験に基づき初期から歴史の基調を苦難

に置いていると指摘する⁵。咸錫憲は「苦難はそれに打ち勝つ者には切磋琢磨するようなものであるが、苦難に負ける者には滅びをもたらす災いである」と言ったように、韓国の歴史がその苦難を栄光のものへと変えることが出来なかったため苦難の歴史となったのは、その苦難に打ち勝つことが出来なかったためであり、物事を深く掘り下げなかったためであると論じている。

第二は、トインビーと咸錫憲が共に歴史の主人公を宗教であると見ている点である。盧明植は、トインビーが宗教を歴史の主人公として見るようになってからその歴史観はより神学的になり、叙述的な側面と哲学的・史論的な側面も共に神中心（God-centered）となったと指摘している⁶。またトインビーは高等宗教の使命は相互競争的ではなく、相互補完的であるとみだが、それにもかかわらず高等宗教はその本質とはかけ離れた教理を盾にして互いに対立し戦っていると主張している⁷。

第三は、両者共に世界を一つのいのちと見て、自分が信じる宗教を絶対視しないで他の宗教にも同じ価値を認めるべきであると主張しである。トインビーと咸錫憲は共にキリスト者であったが、第2次世界大戦を経験してから、世界を一つのいのちとして捉えるようになった。

トインビーは19世紀から20世紀に入ってから、世界は過去の世界観が殆ど解体され、それまで世界を支配していた欧米の支配権は終焉を告げ、西洋文明の優越時代は終わり、世界文明の時代が来る、と1926年に予見している⁸。同じく咸錫憲の史観も決して民族主義史観ではない。咸錫憲の歴史叙述は、民族主義を乗り越えたところから始まっている。間違った民族主義は自分の民族や国家を世界の中心に置き、事実以上に美化し国家を神格化する、とみている⁹。そして、咸錫憲も「今や歴史は性格が変わってきた。物事を決定するのは国民でもなく、民族でもなく、階級でもない。世界だ。環境でもなく、法則でもなく、精神の時代が来つつある。…これが以前とはちがうのである」¹⁰と言い、世界を一つのいのちと見なして、歴史上の出来事や現れた現状や結果に頼るよりはその根底に流れている基調を捉えようとしたのである。以上が、盧明植がトインビーと咸錫憲の歴史観を比較考察したものである。

次の先行研究として、池明観の論文「咸錫憲の朝鮮史観についての考察：藤井武の日本史観との比較を中心に」を取り上げる。本稿では池明観がその論文を通して示唆を与えている点を次の三つに分け考察することにする。

第一に、池明観はその論文の中で、咸錫憲の連載論文が書籍化されていった過程について言及しながら、「咸錫憲は生涯、韓国の歴史について悪戦苦闘した人である」と評価している。

第二に、池明観は『意味から見た韓国の歴史』記述の変遷を考察すれば、咸錫憲の思想がどのように変化していったのかその思想の核心を把握することができる、と指摘しているが¹¹、それは咸錫憲が朝鮮の歴史を「苦難の歴史」として捉え、キリスト教の「苦難の僕（イザヤ53章）」を朝鮮の歴史に当てはめた結果であった。この「苦難の僕」のモチーフは、咸錫憲にとって、キリスト教信仰と朝鮮の伝統、そして科学を共に満足させる歴史

観であったのである¹²。

さらに第三として、咸錫憲の歴史観は苦難を通して神の救いの業が行われることを信じたことにその特徴がある。しかしながら、彼は韓国の歴史を肯定することができなかった、と池明観は指摘する。そのため、日本の支配下でそれに負けず義を守ることを強調し、一縷の希望を失うことなく、韓国が「受難の女王」であることを信じ疑わなかったのである、との見解を示している¹³。

以上、これまで取り上げた盧明植と池明観の優れた先行研究を評価しながらも、さらなる咸錫憲研究のため、先行研究に欠けている視点を指摘しつつ、本稿が目指していることを明らかにする。

これまで挙げた二人の学者、盧明植と池明観において咸錫憲がその歴史観の基調を聖書の「苦難の僕」に基づいている点は明らかにされている。ところが、「受難の女王」も聖書から取り入れた咸錫憲特有のモチーフであり、特にそのシアル思想においては、年を追うごとに「受難の女王」に対する深い思索が成されているのである。この「受難の女王」についての考察が、本稿で取り上げた盧明植と池明観による先行研究には欠けている、と主張できる。

したがって、本稿では咸錫憲の「受難の女王」モチーフを次の三つを中心に論じていくことにする。第一は、「九月会議」での講演を通して、咸錫憲における歴史観が連載論文以降どのように展開されていったのかを考察する。第二に、咸錫憲は「生命の根本原理は苦難である」と告白する。その歴史観の基調である「苦難の僕」は、どのようにして思索されたのかを明らかにする。

第三は、それでは咸錫憲における「受難の女王」とは何を示唆するものであり、連載論文以降にどのような展開をしているのかについて考察する。これらの考察を通して、咸錫憲がその生涯を通して何を目指していたのかを明らかにしていく。

3. 「九月会議」と咸錫憲

それでは「九月会議」における咸錫憲の講演「歴史の意味」が示唆することは何かについて考察していく。その講演の中で、咸錫憲は自分の生涯を振り返り、キリスト教の中でもプロテスタントの土台に立つ自分の思想と歴史観、国家観、民衆についての思索を明らかにしている。

また、自国の歴史を若い学生たちに教える際、キリスト教の聖書における「苦難の僕」像、すなわち自ら苦しみを引き受ける神の子イエスの苦難とその栄光の物語を用いた背景について言及している。さらに、自国を「受難の女王」と例えた経緯について述べる。ここでは講演の内容を取り上げながら、その歴史観、自国観、宗教観について論じていくことにする。

第一に、「九月会議」は世界精神指導者会議として1981年9月23日から30日にかけての一週間、押田成人¹⁴神父が開いた信州・高森草庵にて開かれた「世界精神指導者緊急の

集い」のことであった¹⁵。それは押田神父の悲願であり、韓国、中国、アフリカ、メキシコ、英国、アメリカ、カナダ、インド、バングラデシュ、日本からやって来た、宗教的にはヒンドゥー教、イスラム教、仏教、キリスト教、アメリカン・インディアンによるシンポジウムであった¹⁶。

押田はカール・ラーナー (Karl Rahner) が21世紀のキリスト教が神秘主義的なものへと変わらなければ、無意味な存在となると言ったように、今後キリスト教のあるべき姿として神秘主義的なものを強調した集いを企画し¹⁷、自らが戦争、難民、貧困、抑圧など世界の諸問題を宗教的な側面から取り上げその突破口を模索している人々を参加者として呼びかけた。

神秘主義とは、絶対者と自己との合一体験、すなわち絶対者を人間が自己の内面で直接体験しようとする宗教思想や哲学、体験を言う¹⁸。参加者たちは「九月会議」に参加し、自己の宗教的伝統の根源に生かされている中で、深い関りが生まれ、問題を共有し解決しようという意識が培われていった¹⁹。

そこに咸錫憲はプロテスタント (クエーカー教徒) を代表して韓国から招かれたのである。咸錫憲に流れる神秘主義的な側面について、呉剛男 (오강남) は次のように言及している。

「咸錫憲が神秘主義者であったか、もしくは彼がそのように自覚していたのかは別として、彼は天安 (チョンアン) でシアル農場を開いた時、そこに集まった人々と共に毎朝六時に起き三十分間の瞑想を行い、そしてクエーカーとして毎週一時間の沈黙礼拝に参加した、いわゆる瞑想を実践した人であった。それは咸錫憲が『わたしが父の内におり、父がわたしの内におられる (ヨハネ 14:10)』神聖の内在という神秘主義的特色を強調する底流を目指していたと言える」²⁰。

また咸錫憲自身も「未来の宗教は、人格の宗教、倫理の宗教であるため、こころの宗教であり、こころの宗教であるため、悟りの宗教である」²¹と内面的な神との合一を強調している。また、未来の宗教とは宗教の目的である救いの立場から論じられている必要があり、教理的で迷信的な宗教ではなく、現在の『わたし』を救うものであり、自分で自覚し自分が立っているその場で光を見ることである」と神秘主義的な側面を強調しているのである²²。

第二に、「歴史の意味」の講演とその後に行われた質疑応答を通して明らかになった咸錫憲の歴史観とその思想の展開を次のように考察することにする。

まず、この講演が内包している重要性について言及しなければならない。咸錫憲はこの講演とその後質疑応答を日本語で行ったという点である。11歳の時から日本語教育を受けた咸錫憲は1923年に日本に留学することになるが、その間も日本の植民地下で日本語教育を受けていたため、押田神父が主催した信州・思草庵での集いでは日本語で自分の生涯を振り返り、それまで体験したことが自分の思索の土台になったことを明らかにしている²³。

それでは「九月会議」に参加した当時、咸錫憲はどのような状況下にいたのか。彼はその頃、凄まじい苦しみの中にいた。押田により「九月会議：世界精神指導者会議」に招かれた1981年は、1901年生まれ咸錫憲にとって80歳となる節目の年であった²⁴。

しかし、それまで主幹を務めていた雑誌『シアレソリ』が、前年の1980年3月に発刊10周年を迎え、民衆神学者安炳茂(안병무)との対談「씨알의 소리는 왜 내고 있는가(シアレソリをなぜ出しているのか)」²⁵を掲載し、全国各地でシアレソリ創刊10周年記念公演を行ったものの、その7月に軍事政権の全斗煥による言論統廃合により突然、一方的に廃刊されたのである。

しかしそれにも関わらず、8月17日、咸錫憲はソウルの教会で「絶対勝利」と題して説教を行い、民主化運動をすすめていった。その後は、押田神父が主催した「九月会議」に参加したのを皮切りに、アメリカとカナダを訪問している。また、アメリカではかつて内村鑑三が学生たちに話していた逸話「デニー：He is a great man!」の主人公デニーがいたペンシルバニア州の施設を訪問している。

それでは、咸錫憲は「九月会議」に参加し、学び得たものは何か。本来、「九月会議」では日本で十数年来、禅とキリスト教懇談会となるものが持たれて来た会合であった。そこで信仰、宗派、それぞれの歴史的伝承の違いをかかえたまま、数日を瞑想、祈り、対話のうち一致した心で過ごす体験を通して、集まった人々は他の道、他の信仰への信頼にみちた受容の態度へと変わって行き、深みの祈り、寛容、ゆるしが行われていた。

「九月会議」は、より多くの信仰、伝承、思想、具体的慣習を異にする人々が同様な体験を試みた集いであったのである。そこでの体験を咸錫憲は次のように告白している。

「私は、今まで、天からつるされた大いなる器の中の諸動物を、食べるといわれて、私は不浄なるものは口に入れたことがない、と答えた、ペテロのようであった。私は、自ら知らざるうちに、浄と不浄とを区別していた。私の^な昂ぶりを赦して欲しい」²⁶。

咸錫憲のこの言葉から、この集いを通して彼の他宗教への理解と真理への共感、そして世界で苦しんでいる人々への連帯が深まっていったことがわかる。

次に、「九月会議」における咸錫憲の「歴史の意味」講演とその後の質疑応答を『苦難の韓国民衆史』執筆と、その思想のモチーフとなっている「苦難の僕」、そして「受難の女王」モチーフ思索の展開という三つの論題を取り上げながら、その思想を考察することにする。

3. 1. 『苦難の韓国民衆史』執筆

第一の論題は、咸錫憲の歴史観が宗教観に基づく歴史哲学であるということである。『苦難の韓国民衆史』を著し、また実際に韓国の民衆化を導いたことで苦難の中に処していた咸錫憲は、「九月会議」で自らの生涯を振り返りつつ、その思想の推移を明らかにしている。

日本留学後、母校に戻り歴史教師となった咸錫憲は自国の歴史が自慢すべきものであるよりは貧しさ苦難だけのものだ、と次のように自覚していた。

「わたしは六、七年前から中学生に歴史を教えるようになったが、どうすれば若い胸に栄光の祖国の歴史を抱かせることができるかと努力してみた。

ピラミッド、万里の長城のような雄大な遺物があるわけでもなく、世界に大きく貢献した発明もない。人物がいるにはいるが、その人によって世界歴史が大きく変化したといえるような人もなく、思想がないことはないが、それが世界思潮の主流になったといえるようなものはない。

それよりも、あるものといえば圧迫であり恥であり、分裂であり失墜の歴史があるだけだ。公正な目で見る時なおさらそうである。それは実に耐えられない悲しみである」²⁷。

しかし、咸錫憲は歴史を単なる出来事を並べるのではなく、そこに流れる思想を学生たちに伝えようとして、さらに思索を深めていた。その思索を通して何を見出そうとしていたのかを次のように言及している。

「西洋式の歴史では、なるべくその歴史を正確につかんで、その脈略を、つまり原因結果の成り行きを明らかにする、そういうことが歴史記述の目的だと言いますけれども、わたしは多少、違う考え方をしています。(中略) その史実の解釈が最も重要な意味を及ぼすのだと、このような考え方をしています」²⁸。

また、このように自分を振り返っている。

「韓国歴史を書こうとする時に、事実を並べるのが重要ではなくて、そうする前に、いかなる主観を抱くかが問題だ。(中略) 何といたってもわたしはキリスト信者だから、そして又、そればかりでなく他の人たちの研究したのによりましても、真の意味での歴史哲学はバイブルのみ、聖書のみにある、とそういう事を教わりました。あとではそれを多少直しました。聖書ばかりにあるというのは、あまりに教派的な考え方ではないだろうか。もう少し深い心、広い心で読みますと、ヒンズーのフィロソフィーにもそれはあるし、孔子、孟子、中国の哲学にも歴史哲学はあるもので、ないとはいえない」²⁹。

咸錫憲が振り返っているように、日本留学を通して内村鑑三の無教会主義の影響を受けたことで、彼は韓国の歴史を聖書の中に流れる宗教的な歴史哲学を通して解釈することを試みるようになった。しかし、これらの思索を経て『聖書的立場から見た…』と題していた書名を、六・二五(朝鮮戦争)を経て『意味から見た…』へと変更する。その経緯は以下のようなようであった。

「わたしは自分の歴史を、昔から今に至る歴史を調べながら得た結論を皆さんに申し上げるつもりです。その歴史というのは、実は私が三十歳のころ、冬になると無教会の信者たちが十人そこそこ集まって冬のセミナーをやりますが、そこでひざを並べて座っておって、一緒に祈りながら話した事なんです。それが後に本として出ました。今では日本語にも訳われています(金学鉉訳『苦難の韓国民衆史』新教出版社)。

初めわたしがその歴史を書く時には「聖書の立場から見た韓国歴史」となっていました。ところが後から、クリスチャンばかりでなしに他の人たちも大変喜んでくださるので、あまり偏ったキリスト教的なおいがしては濟まないと思ひまして、少し広げてタイトルを直しました。直訳すると『意味から見た韓国歴史』というようになっています」³⁰。

このように咸錫憲の著書のタイトルがこれらの思索を経て『意味から見た…』へと変わったのは、韓国で六・二五(朝鮮戦争)が起き、時代の潮流を求める人々の多くが、咸錫憲の書籍を手にするようになってからである。六・二五(朝鮮戦争)が勃発した三か月後に発行された第四版の序文には、その理由について、次のように述べられている。

「この文章がこの文章となり得た理由は聖書にある。書いた人の考えでは、聖書の立場からでも歴史を書けるというのではなく、聖書の立場でのみ歴史が書けるというのである。正確に言えば歴史哲学は聖書以外にはないからである。西洋にもなく東洋にもない。歴史は、時間を人格としてみる、この聖書の立場でのみ成り立つ。

キリスト教に関することは、すでに周知のこととして書いたので、聖書を読んでいない人には不便な点が多いと思う。だが、キリスト教を信じる、信じないにかかわらず、聖書を一度も読まずに人類の歴史を知ろうとするのはあり得ない(中略)璞玉を玉と偽った罪で刑罰を受けた和氏のように、二本の足を切られるだけでなく、五体を切られることがあっても、苦難の歴史の中に玉が入っていることだけは事実であり、変わりない確信を持つ」³¹。

この『意味から見た…』へと書名を変えたことについてであるが、このことを宣教的視点からすると、このような咸錫憲の思索と行動は、より多くの人々に受け入れられるキリスト教を伝えるためであったといえることができる。キリスト教を知らない多くの人々が、咸錫憲の本を手にして、キリスト教における「苦難の僕」、すなわちイエス・キリストがなぜこの世に来られ、苦しみ、十字架につけられたかというメッセージに接することができた、と評価することができる。

それは、キリスト教の中に留まり、その理論展開をするよりは、今、苦しんでいる多くの人々に、より容易に理解できるものとするための、いわば「社会全体に福音を宣べ伝える」ことを咸錫憲が目指すことになったためであった。それは咸錫憲の生涯を考察する時、キリスト教から抜け出したと見るよりは、キリスト教の真理を社会全体が共有し広め

るための咸錫憲の決断であった、と見ることができる。

それ以降、咸錫憲の思想とその民衆化運動が多くの人々に受け入れられ、多くの苦難を経た後、韓国に文民政府が誕生したのは、その実りの一つであると言える。また、そのことが可能であったのは咸錫憲の文筆活動が行動を伴うものであったからである。

3. 2. 国家主義への失望

咸錫憲の講演について、葛西實は「咸錫憲が国家主義の下では戦争は必然的で戦争によって人類は滅亡する、現在の文明化した宗教は国家主義と密着して一体である、という指摘を日本の植民地支配の背景からきびしい問題提起を行った。講演の後に行われた質疑応答を通して、その真意は明確にされ、共有の問題として深く受けとめられた。日本の韓国との和解を課題として受けとめられなければならないことが、より明確にされた」³²と言及しているが、咸錫憲は講演の冒頭自分の著書『神様の足にけられて (Kicked by God)』を紹介しながら、これまでやってきて成功したことは一つもなく、どちらかという方の人間で行動があまりできない人間であることが始終足かせであった、とこう振り返っている。

咸錫憲が東京に留学した1923年関東大震災の頃、初めて内村鑑三の集会に行った日、そのエレミヤ書を通して本当の愛国とは何かということについて気づくことができた。その後、第2次世界大戦を通して、浮かんだことは、今までの戦争は国境を変更するだけにとどまったけれども、これからは人類の社会の構造が根本的に変化するであろうということであった。これから宗教は本当の意味からすると、文明に先立ちリードしていかねばならないけれども、今後おそらく、それができないでだろうと考えた。なぜそれが出来ないのかと言うと、現代の宗教はみな国家主義と深く結合しているからだ、と判断したのである³³。

すなわち、今、世界中であらゆる国がぶつかっている問題は国家の問題であり³⁴、今までの時代には、国家が大きな役割を果たしてきた。国家が人類を育て上げるのに非常に助けられたのである。しかし、今は人間が国家よりも成長 (outgrow) した。これからは国家至上主義がそのまま続いていくと人間が成長するのに妨げるようになる。それは国家が人間の生活を助けるためではなく、支配主義に陥っているからである。したがって、将来は国家が変わらなければならない。咸錫憲は政治権力を握っている団体組織が、絶対力をもって支配していくことに反対である³⁵。

また、国家の問題と離すことができないのが経済の問題である。経済と国家は密着していて、国家は互いに競争せずにはたっていけない性質のものであるからである。そのため、戦争は必然的となる。戦争をすると、もう人類は滅亡していくしかない。このことは技術的には解決できず精神的なこと、つまり宗教からしなければならない。

ところが、宗教は国家主義と関わっていることが問題である。そこで、咸錫憲はキリスト教ということから、イエス・キリストが「すべてを捨てて、私についてこい」と言われている招きにこたえ、キリスト教がすべてを投げ捨てる覚悟がなければならないと主張する³⁶。この問題は宗教的な信心と共に、現実の問題を研究していく必要があるのである。

この人類がこれから進む道について、咸錫憲は次のように述べている。

「人間が人間である以上、その奥には人間が神の姿、そのとおりにつくられたものだと
いうことを申します。人間が人間である以上は、必ず自分で作った問題を解決するだろ
うと信じております。しかし現実には、すべての国家、すべての宗教が果たしてそうい
うことをやりうるだろうか。わたしの信仰として信じてますが、それについて具体的に肯定的
な答えを申し上げる實力はわたしにはありません」³⁷。

と警告している。しかし、「それでも宗教を信じるか」という問いに対して、咸錫憲は宗教
を信じる者の覚悟として、人類が減びてもありたけの力を尽くして救う神を信じることを
明らかにしている。それが多くの苦難に直面しながら、非暴力の抵抗運動を成し遂げた彼
の真面目であると考えている。

3. 3. 「苦難の僕」

さて、本稿の第二の論題はキリスト教の核心とも言えるイザヤ 53 章の「苦難の僕」が、
咸錫憲の歴史観に取り入れられた経緯である。咸錫憲は「歴史の意味」講演後の「質疑応
答」の中で、その歴史観に、なぜ、「苦難の僕」が引用されたのかを明らかにしている。

「それで考えたあげく、頭の中にひらめいたものがあります。それは、キリスト教でい
うと、キリストが十字架上で死なれた、それが人類の救いになるという原理です。それは
外から見ると三十三歳の青年の一回の失敗に終わった歴史である。

しかもそれは、恥ずべき、非常にいじめられた、そういう事件だけれども、それが世界
の人間の救いになるという、それではその原理、つまりイスラエルの歴史のバグボ
ンになっているメシアの観念、それを歴史の中に入れることはできないだろうか。一つ
の民族にそれを適用することはできないだろうか。そういうことがひらめきました。

聖書の立場から見た韓国歴史というのは、つまり、苦難のキリストが、救い主として
の栄光のキリストになる、その原理を民族歴史に適用してもいいだろう、と言って考え
たものです。そこで初めてほっと息をつき、十年間続けて歴史を生徒たちに教えたわけ
です」³⁸。

それはキリスト教の救い主イエス・キリストが、十字架上で苦しみを受け死んだことで、
その復活後、栄光を受けるといふキリスト教の核心を咸錫憲が韓国の苦難の苦しみに当て
はめた結果であった。

彼は韓国の歴史を「苦難の歴史」と見たが、その後もその受難が続いているのは、私た
ちがより深く考え、より高い理想を探さない、という神さまの命令ではないかと考えた。
そして、「考えない」韓国の人々を咸錫憲は心配するようになったのである。その後、李
承晩政権の際、ソウルで獄に入れられたのは、『思想界』に「考える民でこそ生きられる」

という論文を掲載することによる。論文の中で、「苦しみの中でも考えがないがために、神さまの鞭は続くが、私たちが歴史の地下水を乗り越え、苦難の負い目を脱ぎ去る日、私たちにも栄光の日がくるのではないか」と叱咤すると共に励ましている。つまり、考えを掘り下げ、現在の失望を希望へと変えるものを導き出すことを咸錫憲は促したのである。そのことを「読者はみずからこれらを磨いてわれらの受難の女王のまえにおくことを望む」³⁹と咸錫憲は表現しているが、咸錫憲自身がその考えを掘り下げ導き出したものは何かについて、これから考察していくことにする。

4. 「受難の女王」が「栄光の女王」に

4. 1. 「受難の女王」思索

それでは、咸錫憲が韓国史における失望を希望へと変える思索を続けた結果、導き出したものは何かを論題の第三として「受難の女王」を取り上げ、論じていく。

まず咸錫憲は「受難の女王」モチーフを連載論文執筆の時から取り入れているが、本稿ではその連載論文執筆期を第一期とし、『聖書の立場から見た韓国の歴史』として書籍として出版された1950年を第二期、そして第三期を著書のタイトルを『意味から見た韓国の歴史』に改題した1965年（第4版）のそれぞれの時期において、「受難の女王」が咸錫憲の執筆や講演活動においてどのように言及され、思索の展開を見せているのかを考察することにしたい。

第一期の連載論文執筆期における「受難の女王」についてである。この時期から「受難の女王」は連載論文の前半と後半の二か所に言及されている。前半は、『聖書朝鮮』「6. 地理的に決定された朝鮮史の性質」（66号：1934年7月）の中で、国の地理をいろいろな角度からみる時、「受難の家としてつくられたと考えるようになり、大国の狭間に国を維持していこうとしたので、苦難の歴史にならざるを得なかった」と言及しながら、タゴールの「ギータンジャリ」の一節を紹介している場面している⁴⁰。

「おお、わが愛よ、あなたは多くの人の後のどこの陰に隠れておられるのか？人々はこの埃っぽい道路で、あなたをわからず押しのけて過ぎて行きました。私がここであなたに差し上げる物をひろげて長い間退屈して待っているあいだ、道行く人々が私の花を一つ二つと取って行き、今や籠はほとんど空になってしまいました。（中略）私は乞食娘のように顔を裾に隠してすわって、どうしてすわっているのかとたずねる彼らに、目を伏せて答えもしません。おお、私があなたを待っていると、あなたが来てくれると約束したことを、どうして人たちに言えるでしょう。（中略）私はただ待ち、泣きながら、空しい思いにこがれて胸を痛めるだけでしょうか」⁴¹。

この道端に座っている乞食娘は、当時、国を失い日本の支配下にいた自国の姿であった。「差し上げる花は奪われ、分別もなく王妃を夢みると嘲笑され、空しく思いこがれて疲れ果

てた」受難の女王なのである。その自国に世界史の中でその使命感を見出し、希望を持つことを促したのが、咸錫憲の「受難の女王」である。

また、第一期における連載論文の後半部分の「受難の女王」言及は、「34.生活にあらわれた苦悶の姿」においてである。それまでの歴史、信仰、芸術、風俗を振り返ってみる時、フランスの名匠ロダンの彫刻「娼婦であった女」（美しかりしオーミエール、1888年）が自国の姿のように思えてならない、と言及する場面である⁴²。この後半部分の「受難の女王」言及に関しては、第三期に至るまで同様な言及が成されている。

それでは、第二期において「受難の女王」言及はすでに述べた第一期における言及箇所の以外に見られるのか。「それはあった」と言える。連載論文が『聖書の立場から見た韓国の歴史』として書籍化された際⁴³、咸錫憲は序文の中で「受難の女王」について言及している⁴⁴。この「序文」は六・二五⁴⁵（朝鮮戦争）が勃発する三か月前の1950年3月に執筆されていた。その後、六・二五が起きると、その最中、またその後の不安な世界状況下、咸錫憲の著書は生きることの意味を探し求める多くの若者に読まれることとなった。咸錫憲の講演会、文筆活動などを通して、多くの人が勇気づけられたのである。

最後に第三期の書名を『意味から見た韓国の歴史』に改題し、出版した1965年（第4版）において、「受難の女王」はどのように言及されているのか。この版はこれまでの内容に加え、その間に起きた六・二五の出来事が振り返えられている。

咸錫憲にとって、六・二五の爆撃の音は、実は新しい時代の到来を告げる音であり⁴⁶、六・二五の出来事を通して明らかになったことは、対立では人類の問題が解決されないこと、そのため⁴⁷、読者たちに以前よりも増して物事をより深く掘り下げることを次のように促している。

「今やわれわれが本来、平和を愛する優しい民族であったこと、苦難の基盤を引き受けたこと、大きな国をつくれなかったこと、他国の植民地になったこと、敗けた国の民でありながら勝った国の民になったこと、世界を二つに分ける線がわれわれの背に引かれたということを今一度、今一度深く深く考えてみなければならない、そこで宗教的体験が生まれて来るまで」⁴⁸。

歴史家の盧明植は、「人がどのように苦しい経験をしたとしても、その意味が何かについて問い、また問い続けることで、その意味を見出すことができないならば、何の意味をも成さないのと同じように、一つ民族がどんなにひどい歴史的経験をしたとしても、その歴史的な意味を見出すことができないなら、その民族もまた何の意味をもなさない」と指摘し、そういう意味において、六・二五が示す歴史的意味が何かを深く掘り下げなければ、私たちもまた何の意味をなさなくなると指摘している。

上記のように、咸錫憲が人々に六・二五が示す歴史的意味を深く掘り下げ考えることを促した際、それは「宗教的体験が生まれるまで」というふうに、常に物事の根本を宗教的な土台で捉えていることは、注目すべき点である。また、咸錫憲が「宗教的な体験が生ま

れるまで」物事を掘り下げることが促す時、それは単に礼拝堂で泣き叫ぶ悔い改めではなく、畑、鉾山、台所、オフィスなどひとり一人が生活するその場において、血と汗を流し、生活全般に及ぶまで新たにされることを言うのであった。彼は次のように主張している。

「国民全体が悔い改めねばならないだろう。礼拝堂で泣き叫ぶ悔い改めではなく、畑で、鉾山で、荒波の中で、台所で、教室で、オフィスで、血と汗で行う悔い改めでなければならない」⁴⁹。

これ以後、咸錫憲は「考える民でこそ生きられる」と題した論文を『思想界』に投稿している。それは六・二五の出来事を咸錫憲が掘り下げたことで得た以下のような知見であり、これは韓国社会に大きな反響を及ぼすこととなった。

「この一点に集約される。深い宗教を生もうとすること。考える民になること。深い宗教、固い信仰を持って。そうして汝自身を取り戻せ。そうして、われわれが一つになるだろう」⁵⁰。

この文章を投稿したことにより、咸錫憲は捕えられ、投獄された。この時、咸錫憲は自分が捉えられた理由を「宗教的な立場から現実問題を扱うことをしたから」とであると見た。その二か月後、彼は再び論文「『考える民でこそ生きられる』を解き明かす」を書き、次のように述べる。

「八月号に『考える民でこそ生きられる』というタイトルで六・二五を記念する文を掲載したことが警察で問題になり、少なからぬ社会的波紋をひきおこした。まだ事件が完全に解決したわけではないので、私としては慎重に静かにしているのが妥当なようでもあるが、一方では社会に疑惑をおよぼしたことでもありはしないかと思うと、黙っているわけでもいけない。検察当局でもようやく私の意とするところをおおよそわかってくれたようだし、また監獄から戻ってきて、いろいろな新聞に現れた民衆の世論を総合してみれば、一般的に私が述べたことを分かってくれている様子だ」⁵¹。

これらの出来事を通して、咸錫憲はより深く考えを掘り下げていった。そして、1965年に発行された第四版『苦難の韓国民衆史』「序文」の中では、次のように「受難の女王」について言及している。

「歴史は審判であると同時にまた預言だ。未来に対する預言であるために過去を審判することができる。(中略) ハナムを、真理を避け、逃げようとせず、真正面から対して立つ瞬間、道は開かれるだろう。(中略) 新しいものが生まれ出ようとしている。この日は何の日か。子を産む日だ。分娩の日だ。この老いたる娼婦、物もらいの処女、受

難の女王が、新しい日の王を産もうとして叫ぶ陣痛の叫びが六・二五だ。四・一九だ。五・一六だ。ところが産む力がない。子を産むようになってからも産む力がない女よ、おまえと子が共に死ぬだろう」⁵²。

ここの「子を産むようになってからも産む力がない女よ、おまえと子が共に死ぬだろう」という表現は、旧約聖書イザヤ書 66：8-9「子を産む女」に由来している。

「だれがこのような事を聞いたか、だれがこのような事どもを見たか。一つの国は一日の苦しみで生まれるだろうか。一つの国民はひと時に生まれるだろうか。しかし、シオンは産みの苦しみをするやいなやその子らを産んだ。わたしが出産に臨ませて産ませないことがあろうかと主は言われる。『わたしは産ませる者なのに胎をとぎすであろうか』とあなたの神は言われる（イザヤ 66：8-9）」⁵³。

咸錫憲が引用したイザヤ書 66 章は、イザヤ書全体の結びとなる章である。イザヤ書は、咸錫憲のシアル思想につらなる思索、例えば「種（たね：씨알シアル）」（6 章）、「苦難の僕」（53 章）、「子を産む女」（66 章）についての言及がある預言書であることは注目に値する。

また、イザヤ書全体は否定的な責めや審判と、肯定的な歴史的展望が示されているものの、実はその展望が「シオンの回復」に集中している。すなわち、救いが全世界にまで及ぶこと、またキリストの再臨、最後の審判が記されているのである。

また、イザヤ書における「産みの苦しみをする女」とは、いずれも女性名詞であるシオン、エルサレムに象徴されるイスラエルを指す言葉である。その彼女が「産みの苦しみをする前にその子を産み、陣痛の起こる前に男の子を産み落とした」とは、産母がその子を産む際、陣痛の苦しみがあるようにシオンが苦しみを受けるが、そのシオンが産みの苦しみをするやいなや、子らを産むとは、神による全面的な恵みをあらわしている。子を女の胎に宿した神は、その子が生まれるまで、その産みの苦しみをする女を励ます、と勇気づけているのである⁵⁴。

4. 2. 「受難の女王」が「栄光の女王」に

それでは、咸錫憲における「受難の女王」は、イザヤ 66 章の「産みの苦しみを受ける女」が、残された民にとって慰めと希望のメッセージとなるように、その苦しみを乗り越えた先につき慰めと希望が見出せたのか。また、「受難の女王」が待ち望んでいる新郎はいつ来るのだろうか。咸錫憲において、その日は韓国が平和的な統一を迎える時である。そのことについて、1958 年に、以下の通り「栄光の女王」を見出している。この詩は『『考える民でこそ生きられる』を解き明かす』の結論として、母なる国に捧げる祈りとなっているが、それはまさにこれまでの「受難の女王」が「栄光の女王」となるその日への期待が込められている韓国全土の姿があらわされている。

「母なる大韓民国よ！

永遠の白頭を頭にいただき、
神聖なる妙香を胸にあしらい、
一万二千カラットの金剛を手にも、
新たなる国の礎石の漢撃を踏みしめて立たれよ。
三千万のチマの中に三千万のシアルを宿し、
五千年の長い歴史の闇を照らすともし火を守り、
恋しい人を迎えようとする大いなる明るさ（太白）の女王よ。
あなたがどうして気高さ、広大さを忘れ、ささいなことで言い争い、
疑いを抱き、果ては戦おうとするのですか。
みことばの大道にたちふさがろうとするのですか。
あなたは桓雄様（朝鮮の神話上の始祖、檀君の父）の業績をお忘れになったのですか。
温達オンダル（高句麗時代の大將）の善良な人柄を失われてしまったのですか。
剣君（七世紀頃の新羅の花郎）の賢明さを捨ててしまわれたのですか。
処容（新羅時代、歌舞をよしく認められて宮中に入ったと伝えられる人物）の美しさ
はどこに行ってしまったのでしょうか。

母なる大韓民国よ！

苦難の女王よ！

あなたが貧しいからといってあなどられるように思われますか。
あなたの鏡をのぞいてごらんなさい。
あなたの顔に垢がついていませんか。
腰に触れてみてください。
服を脱がされていませんか。
チマを見てください。
しがみついていませんか。
かごを見てください。
花がなくなってからっぽになっていませんか。
腕や脚を見てください。
いたるところ傷だらけではありませんか。
あなたのロウソクがしばらく消えていたあいだに、
あなたは泥棒に踏みにじられたのです。
あなたが今、まちこがれる人がくるといふ叫び声にやおら立ち上がったとは言え、
その姿でどうやって新しい日の待ち人を迎えばよいでしょうか。
どうして自分の母に乞食になってしまったなどといえましょうか。
夜が明けようとするのに、
まだ眠りからも冷めず準備もできていないのですから、

もどかしくてならないのではありますまいか。

母よ！何はともあれ、この不幸なシアルたちをかき抱き、
ともにまみえ慟哭することをお許してください。
高麗の四百年間を泣くに泣けず、
李朝五百年を泣くに泣けず、
開放されたのにまた泣くこともできないのですか。
悲しんで泣けば、
天からあわれに思って着るべき服や乗るべき車が落ちてくることでしょう、母よ！
お母さんが身ぐるみはがれ追い立てられた
八月二九日（併合条約が公布され朝鮮が植民地化された日）、
この文を書こうとしたのですから、
万感ざわまり、
涙で何も見えず言葉ももう続けられません」⁵⁵。

この「栄光の女王」は、いつか今の韓国と北朝鮮の間に38度線が引かれた状態ではなく、南と北が一つとなり、世界の平和に貢献できる日のことである。咸錫憲は早い時期から人類が生き残るのは平和の道しかないと主張し、特に南と北とに分けられた韓国の平和的な統一を呼びかけている。韓国の平和的な統一が成し遂げられる日、世界の歴史に新しい道筋を立てることができるのだ、との期待を咸錫憲は抱いていたのであった⁵⁶。

いまだその日はいまだ来てないけれども、イザヤ66章に「その胎に子を宿している母がいつかは必ずその子を産む日が来る」と記されているように、咸錫憲は苦しくても必ず到来する日であり、いつかその日は到来することを信じ、「礼拝堂だけでなく、鉸山で、荒波の中で、台所で、教室で、オフィスで、血と汗で行う悔い改め」、また準備すべきであることを私たちに促したのであった。

5. 終わりに

これまで咸錫憲における「歴史の意味」について考察してきた。本稿では1981年押田成人神父が主催した「九月会議」における咸錫憲による日本語での講演と、質疑応答を中心に考察を行った。この講演は、日本語で、80歳を迎える咸錫憲がその人生と宗教に根差したその歴史観の軌跡があらわれた点において大きな意味があると言える。そこで明らかになったものは次の三つである。

第一は、咸錫憲の歴史観は聖書に基づく宗教哲学から見出されたものである。それは『聖書朝鮮』に連載論文としてその歴史観を発表して以降、『聖書的立場から見た韓国の歴史』として書籍化され、改題して『意味から見た韓国の歴史』となった以降も、その歴史観は「苦難の僕」に見られるキリスト教の苦難史観であったことがわかる。その中で、一

貫して第2次世界大戦以降に国家主義の懸念から民衆が主体となるシアル思想が思索されたことが明らかになった。

第二は、押田神父の「九月会議」に参加したことは咸錫憲にとってどのような意味があったのかである。「九月会議」の集いを通して、咸錫憲が「私は…天からつるされた大いなる諸動物を食べろと言われて、不浄なるものは口に入れたことがない、と答えたペテロのようであった。私の昂ぶりを赦して欲しい」と言ったように、以前にもまして他の宗教への理解と真理への共感、世界で苦しんでいる人々への連帯が深まったことが言える。

第三は、咸錫憲における「受難の女王」は、連載論文当時、国を失った自国の姿であった。それでは、韓国が独立した後「受難の女王」は咸錫憲にとってどのように捉えられているのか。これまでの筆者の研究を通して、韓国独立以降、1980年代における民衆化運動が活発であった際、咸錫憲は苦難の中で「受難の女王」を用いていたことがわかる。

ところが、本稿を通して新たに分かったことは六・二五（朝鮮戦争）の8年後である1958年に執筆した「考える民でこそ生きられる」の中で、「受難の女王」はいつか南北が一つになるその日に「栄光の女王」へと変わると希望を見出していたことがわかった。

現在はこのような咸錫憲の「栄光の女王」に由来した思想が、平和学の視点から韓国の統一に向け、具体的な学びと実践が行われている⁵⁷。WCC（世界キリスト教会協議会）⁵⁸や、韓国キリスト教会⁵⁹も共に連帯している。このように自国の歴史を通して、世界平和への貢献とその使命を見出した咸錫憲の「受難の女王」について、今後も活発な研究と論議、実践が成されるべきであると考ええる。

注

- 1 咸錫憲「歴史の意味」『九月会議：世界精神指導者 緊急の集い』思草庵、1984年、96-118頁。
- 2 宮本久雄・石井智恵美（編）『世界の神秘伝承との交わり：九月会議』（押田成人著作選集第2巻）日本キリスト教団出版局、2020年。
- 3 노명식（盧明植）「토인비와 함석헌의 비교는 가능한가（トインビーと咸錫憲の比較は可能か）」咸錫憲記念事業会（編）『咸錫憲思想을 찾아서』図書出版삼인、2001年、141-201頁。
- 4 盧明植「トインビーと咸錫憲の比較は可能か」『咸錫憲思想을 찾아서』도서출판 삼인、155-156頁。
- 5 盧明植「韓국의 歴史家 咸錫憲」咸錫憲記念事業会（編）『民族의 큰思想家 咸錫憲先生』한길사、2001年、299-366頁。
- 6 盧明植「トインビーと咸錫憲の比較は可能か」『咸錫憲思想을 찾아서』、174-175頁。
- 7 盧明植、前掲書、176-177頁。
- 8 盧明植、前掲書、185頁。
- 9 咸錫憲（著）金学鉉（訳）『苦難の韓国民衆史』（咸錫憲著作集第2巻）、新教出版社、1993年、19頁。
- 10 咸錫憲、前掲書、19頁。
- 11 池明観「咸錫憲の朝鮮史観についての考察：藤井武の日本史観との比較を中心に」『咸錫憲思想을 찾아서』、204頁。
- 12 池明観「咸錫憲の朝鮮史観についての考察：藤井武の日本史観との比較を中心に」、204-205頁。
- 13 池明観、前掲書、370頁。

- 14 押田^{しげと}成人氏は1963年より信州・八ヶ岳山麓に「高森草庵」を結び、農耕生活を営むかたわら、祈りと思索の人生を送る。国や宗教を超えた人々との対話、インドや韓国の精神的指導者たちとの協働、世界各国における霊的指導を通して、人間の宗教的生命をあらわして生かす「地下流の霊性」を編んでいた(宮本久雄・石井智恵美(編)、前掲書、259頁)。
- 15 宮本久雄『『解題 九月会議の霊機』、『世界の神秘伝承との交わり：九月会議』、253頁。
- 16 宮本久雄・石井智恵美(編)『世界の神秘伝承との交わり：九月会議』、126頁、および88-93頁。
- 17 葛西實「寄稿エッセイ：九月会議の息吹」『世界の神秘伝承との交わり：九月会議』の242頁によれば、「九月会議」は「地下水を求めて」という題でNHKで放映されている。
- 18 「神秘主義」『世界大百科事典』第14巻、平凡社、2009年改訂新版、446-449頁。
- 19 宮本久雄『『解題 九月会議の霊機』、『世界の神秘伝承との交わり：九月会議』、239頁。
- 20 吳剛男(오강남)「咸錫憲思想의 比較思想史的인 意義:神秘主義的觀點을 中心으로」(シアル思想研究会 月例発表会)、2007年5月、6頁。
- 21 咸錫憲(著) 森山浩二(訳)「新しい時代の宗教」『新しい時代の宗教』(咸錫憲著作集第4巻) 新教出版社、1994年、128頁。
- 22 김하봉「生命과 믿음:咸錫憲先生의 思想」『咸錫憲思想을 찾아서』、96-97頁。
- 23 咸錫憲「歴史の意味」宮本久雄・石井智恵美(編)『世界の神秘伝承との交わり：九月会議』(押田成人著作選集第2巻)、118頁。
- 24 誕生日の3月14日咸錫憲は「振り返って見る私の生涯」を題として、関係者と共にソウル YMCA 講堂で80歳記念講演会を開いている。講演会の司会は安炳茂(안병무)、メッセージは金東吉(김동길)が、略歴紹介を金龍俊(김용준)が担当している『e-book 씨알함석헌전집:부록』年表(<http://ssialsori.net>:2022年8月28日閲覧)
- 25 「咸錫憲과 安炳茂와의対談:씨알의소리는 왜 내고 있는가」『씨알의 소리』1980年4月、10-32頁。
- 26 押田成人「はじめに」『九月会議：世界精神指導者 緊急の集い』思草庵、4頁。
- 27 咸錫憲(著) 金学鉉(訳)「5. 韓国史の基調」『苦難の韓国民衆史』新教出版社、70頁。
- 28 咸錫憲「歴史の意味」『九月会議：世界精神指導者緊急の集い』、105-106頁。
- 29 咸錫憲「歴史の意味」『世界の神秘伝承との交わり：九月会議』、日本キリスト教団、107-108頁。
- 30 咸錫憲「歴史の意味」前掲書、105頁。
- 31 咸錫憲『苦難の韓国民衆史』、序文3-4頁。
- 32 葛西實「寄稿エッセイ：九月会議の息吹」宮本久雄・石井智恵美(編)『世界の神秘伝承との交わり：九月会議』、240頁。
- 33 咸錫憲「歴史の意味」『世界の神秘伝承との交わり：九月会議』、117頁。
- 34 咸錫憲「歴史の意味」前掲書、120頁。
- 35 咸錫憲「歴史の意味」前掲書、120頁。
- 36 咸錫憲「歴史の意味」前掲書、121頁。
- 37 咸錫憲「歴史の意味」前掲書、122頁。
- 38 咸錫憲「歴史の意味」『九月会議：世界精神指導者緊急の集い』思草庵、107-108頁。
- 39 咸錫憲『苦難の韓国民衆史』、序文3-4頁。
- 40 「地理的に決定された朝鮮史の性質」『聖書朝鮮』66号、1934年7月。日本語訳は、『苦難の韓国民衆史』、新教出版社、82頁によっている。
- 41 咸錫憲『苦難の韓国民衆史』、82-83頁。
- 42 咸錫憲、前掲書、355-357頁。

- 43 韓国語の『성서적으로 본 한국역사』(第3版)の序文は『苦難の韓国民衆史』の「序文」に、また改題した『뜻으로 본 한국역사』(第4版)の「序文」は『苦難の韓国民衆史』「訳者あとがき」にその経緯が紹介されている。
- 44 咸錫憲「序文」『苦難の韓国民衆史』、3-4頁。
- 45 1950～1953に起きた韓国と北朝鮮の戦争。これ以降は六・二五と表記する。
- 46 咸錫憲、前掲書、336頁。
- 47 咸錫憲、前掲書、336頁。
- 48 咸錫憲、前掲書、341頁。
- 49 咸錫憲(著) 仁科健一(訳)「考える民でこそ生きられる」、198-199頁。
- 50 咸錫憲、前掲書、198-199頁。
- 51 咸錫憲、前掲書、200頁。
- 52 咸錫憲、前掲書、342-343頁。
- 53 咸錫憲『苦難の韓国民衆史』、342-343頁。聖書引用は参考文献の引用箇所によって異なる。
- 54 Kang Byoung Do, *The Chokmah Commentary*, The Christian wisdom: Seoul Korea, 1993, 771-779頁。
- 55 咸錫憲(著) 仁科健一(訳)「考える民でこそ生きられる」、211頁。
- 56 송석중 「함석헌, 그는 누구인가」『咸錫憲思想을 찾아서』、20-21頁。
- 57 その一例として、(社)平和のシアルたち－国境線平和学校は北朝鮮の人権と韓半島平和の関連性を重視しつつ、国境線住民たちの現場証言と海外の韓国ディアスポラ社会および国際社会を結ぶネットワーク形成のため、2022年DMZ国際人権平和会議を催している。
- 58 2013年WCC釜山総会で「正義と平和の巡礼」を掲げて以来、2022年8月31日～9月8日ドイツ・カールスルーエで開かれた第11回総会では「この世界は、多くの形の不正と、多くの人々、生き物、そして地球そのものの痛みによって傷つけられた世界であり、(中略)それは愛によってわたしたちを和解と統一に向かわせることが神の御心であることへの信仰と信頼の表明」が成されている。WCC(編)村瀬義史(訳)「第11回WCCカールスルーエ総会(2022)の主題をめぐる考察」、2022年7月。
- 59 2022年8月11～14日は韓国キリスト教教会協議会(NCCK)と韓国キリスト教放送局(CBS)が共催した韓半島平和FORAMが「分断された韓半島で平和の道をたずねる」の題で開かれた。

